

この世界の片隅に

標題の映画がやっと星ヶ丘三越映画劇場にやってきた。昨年から観たかった映画だ。平日の午後だったが、劇場は満員だった。昔から映画は大好きだが、目を悪くしてから、あまり劇場に足を運んでいない。久しぶりだ。

映画のストーリーはこうだ。1944（昭和19）年2月。18歳のすずは、突然の縁談で軍港の街・呉へとお嫁に行くことになる。新しい家族には、夫・周作、そして周作の両親や義姉・径子、姪・晴美。配給物資がだんだん減っていく中でも、すずは工夫を凝らして食卓をにぎわせ、衣服を作り直し、時には好きな絵を描き、毎日の暮らしを積み重ねていく。1945（昭和20）年3月。呉は、空を埋め尽くすほどの艦載機による空襲にさらされ、さすが大切にしていたものが失われていく。それでも毎日続く。そして、昭和20年の夏がやってくる。

写真はパンフレットがなかったので、「ノベライズ」版の表紙から。人気を呼んだアニメ映画だけに見ごたえがあり、2時間余りを堪能できた。アニメ映像も「エイゾー」である。戦時下の庶民の生活がリアルに描かれており、戦争の悲惨さを草の根から、しっとりと伝えている。

なんだか私の母を思い浮かべた。名古屋で父と結婚して、まもなく父は戦地に。姉を出産したあと岐阜に疎開して、姉を不慮の事故で亡くしてしまう。戦時下の苦しく悲しい母の生活を思い浮かべながら、じっと映画を鑑賞した。

この映画を観て、呉という「軍港」にも注目した。広島という原爆だが、呉も軍事都市ならではの空襲の被害を受けた。その呉で「この世界の片隅に」に生きた一人の女性、すずの物語だ。

『広島県史』に呉のことがすこし書かれていた。昭和20年（1945）3月から7月にかけての空襲により呉市は、死者1939人、負傷者2948人の人的被害と、全焼・全壊住宅2万2954戸、半焼・半壊住宅635戸という物的被害をこうむった。これによる戦災者は実に12万9100人にのぼった。さらに9月17日から18日にかけて襲来した枕崎台風は、死者1154人、負傷者440人、流失家屋1162戸、半壊家屋792戸、床上浸水家屋8814戸という空前の被害をもたらした。

7月1日から2日にかけての焼夷弾攻撃で市街の大半を失った呉市には、海軍の力もあっていちやく焼跡に1000戸におよぶ三角兵舎が建設された。しかしこうした復興への息吹きは、8月15日を境に海軍の威光がくずれるとともに鈍化した。そこへ枕崎台風の襲来、占領軍の進駐がつづき、一時は40万人をこえたといわれる呉市も死の街と化した感があったのである。



(2017年7月17日)